



BEYOND THE BORDER

未来への発展を築く。





全学支援の 意義と現状

特集

Technical support
for all members
at Tohoku University

昨年からは総合技術部では「全学支援」を掲げ、技術相談窓口を運用しています。「このような装置を作りたい」「この計測を実現できないか」といった技術的な依頼や相談を全学から受け付け、技術職員の経験や知識、ネットワーク等を広く活用し、専門的なアドバイスをしてきました。そこで、部局を超えた支援体制を作る意義や設置経緯、苦労や工夫、実際の依頼者と担当者の感想、今後の展望などについて、それぞれに関わった方々に聞きました。

部局を超えた実質的支援へ 全学支援の相談窓口が誕生

— 技術相談窓口を設置した経緯はどういったものだったのでしょうか？

三浦重幸 (以下、三浦) 平成27年の12月、総合技術部長と統括技術専門員会議の懇談会で、部局を超えた技術支援が話題になりました。技術相談室を設置して全体として対応していく必要性、競争的資金で導入された装置設備等の共用を考えたほうが良いという意見が出たので、その後、他部局からの依頼について、対応可能なものがどういふものかの検討を進めました。翌年1月の職群代表会議で、全学支援をさらに具体的に進めることを決定。最初から実質的支援をするのは難しいので、ニーズの把握も含め、まずは相談窓口を設けて対応していこうと、平成28年度からスタートしました。

— 平成28年の8月にはホームページがオープンしていますね
三浦 ホームページは年度初頭に情報・ネットワーク群の担当者に依頼し、8月に設置。9月に全学に向けて周知を開始しました。

大友雅彦 (以下、大友) 相談窓口のポータルページは、部局の中でホームページ作成の経験がある方をお願いしたので完成が早かったです。ポータルページから各職群への相談窓口のページに推移する方式で、相談者がどの職群に相談して良いか不明な場合を想定し、6職群に加えて総合相談窓口も設置しています。各職群にはどういった相談への対応が可能か検討してもらい、その内容を明示しているので利用者は判りやすいと思います。

— 最初の窓口を作る点で苦労されたことはありましたか？

大友 セキュリティを考慮して、総合技術部のwebサーバとは別に、専用サーバと受付サイト構築には、部局の異なる情報・ネットワーク群の職員が担当しています。限られた時間でしたが、サーバの設計・運用に関する検討や実作業を含め、少なからず苦労はありましたが良いものができたと思いますよ。今回の作業を通して、他部局の職員同士の連携も深められたのではないのでしょうか。

— サイト公開後の反応はいかがですか？

三浦 相談が来ると各職群にメールが届き、統括技術専門員、技術専門員が対応し、やりとりしていきます。昨年28年度は9月から始めて5件の問い合わせがあり、今年度は7件。実質的な支援につながっています。

大友 情報・ネットワーク群には2～3件の問い合わせがあり、職群内で検討・情報を収集し、様々な提案を行ってきました。

猪狩佳幸 (以下、猪狩) 分析・評価・観測群には、分析装置を使うのではなく分析方法そのものを聞いてきた方がいました。分析は装置の紹介がメインで、手法については研究レベルとなり技術職員の仕事ではないので、助教の先生のコメントをいくつかいただいて回答しました。

三浦 これまで電話で聞いていたようなことでも相談窓口を利用されたのかもしれませんがね。総合技術部としては、せっかく作った窓口なので積極的に利用して欲しいと思っています。まだまだ周知が足りないという声があるので、現体制を維持しながらPRを強化していかなくてはならないと感じています。

大友 今後は、各職群への相談情報を全学的に共有・活用できるようなサイト構成を検討していきたいと思っています。— 各部局の仕事もある中で、技術職員が窓口からの仕事にあたることに抵抗はありませんか？

猪狩 分析・評価・観測群に関して言えば、そもそも共通機器を設定している部局が多く、部局外からの仕事を受けたりしているので消極的な人はいません。部局によっては先生方が技術職員を離したくないという面もあるかと思いますが、全学支援の重要性はわかっているので、今いる職員の未来を考えたら大体の方が理解を示してくれます。

三浦 統括技術専門員会議の人事評価制度担当部会では、新しい人事評価制度を検討し、平成30年4月から施行したいと進めています。その中では、現在は部局内での仕事に限られている評価の他に、総合技術部への支援、対応という項目が追加される予定です。相談件数も増えていきますし、相談窓口による全学支援は今後さらに進んでいくでしょう。

迅速な対応を可能にする 受付体制と、浮かび上がる課題

— 相談窓口の受付体制について、利用された方の声を聞いていきたいと思います。まず、渡部教授は、普段どのような研究をしているのでしょうか？

渡部浩司 (以下、**渡部**) 私はサイクロトロンラジオアイソトープセンターに所属し、放射線管理研究を担当しています。加速器を使用し様々な実験をしている所で、主に放射性物質をラベルした薬が、人や動物の中でどのように動いているかを定量的に調べています。画像処理や解析をしたり、放射線測定器を作ったり、学生や職員向けに放射線の講習会などの業務をしています。

— 今回相談窓口を利用したきっかけは？

渡部 昨年岡山で行われた放射線安全管理学会で、福島学院大学で原発事故による環境放射線を調査されている杉浦先生と出会い、走査電子顕微鏡 (SEM) が使えるかどうか聞かれました。私は、SEMに関して詳しくなかったため加齢医学研究所 (以下、加齢研) の佐藤和則さんに聞いたところ、加齢研のSEMでは、希望の撮影ができないとのことと総合技術部の相談窓口にお問い合わせしたら、と助言をいただきました。そこでホームページからメールをしたところ、その日のうちに回答がきて、近くにある工学部の先生を紹介していただきました。杉浦先生にも連絡し、今でも研究は進行しています。

— 対応が迅速ですね。どのような体制で受け付けているのですか？

望月俊介 (以下、**望月**) 相談窓口から来たメールは各部署で誰が対応できるか検討し、手を上げてもらって相談者と話しながら進めるという対応なのですが、この時はメールを見た佐藤秀孝前職群代表が「SEMだったら工学部にある」と心当たりがあり、いつも以上に早く回答できたという経緯があります。サイクロトロンは工学部に近かったので、直接持って行った方が早いと総合的に判断しました。

渡部 そのサンプルはうちで測定した後にSEMで測るので、距離が近い方が良いのです。大変助かりました。

望月 空気中に出せないものや寿命の短いサンプルの相談もよく来るので、そういう時には距離的に近い方が有利ですよ。うちならできるとみんなが手を上げた場合は、総合的に適合性の高い場所を考えて決めています。

猪狩 工学部は以前から学内外を対象に、独自に部局の窓口対応をしているのでそういった対応ができるんですね。

— 対応に苦労したこと、改善したい点はありますか？

望月 技術的には測れるけれども持ち込みが危険な物質

は、対応できる設備がないのでお断りしています。バイオハザードの危険があるものや放射性物質そのものを測りたいという場合がそれにあたります。また、最初にどんなものを測りたいか、細かく情報を与えてもらった方が対応は早くなります。「この物質に何が入っているか知りたい」と、漠然とした内容の場合は色々な人に聞くことになり時間がかかるので、先行研究の情報があると非常に助かりますね。

渡部 今回、私は佐藤さんからの紹介でこの窓口を知りました。他には、テクニカルサポートセンター (以下、TSC) の方が知られていますよね。TSCはどの装置が適しているかまでは回答を得られないので、TSCにも相談窓口のリンクがあればいいなと思いました。

猪狩 ワンストップで便利に利用してもらいたいという思いはありますが、装置の使用料金が統一されていないので、そこも課題として残ります。

望月 装置によって測定内容が違いますし、同じ装置でも前処理の必要の有無、難易度によってかかるコストは変わってきて、数値化するのが難しいです。料金が時間あたりのところもあれば検体あたりで設定している装置もあり、そこが合わないんです。1サンプルの測定に時間がかかるものだった場合、時間あたりだと不利になるので検体ごとの料金設定にすることもあり、TSCの考え方と異なる場合もあります。

猪狩 農学部はTSCに任せていますね。技術職員が少ない部局だと全部任せて助かる部分があるようです。

望月 部局または部局の部屋ごとに違いがあるんですね。— 相談窓口を始めたことで、解決すべき問題点が浮き彫りになったと言えますね。

TSCとの連携は可能か？ 全学支援の理想とは

— 最後に、TSCから相談窓口へ相談があったケースについて。相談者の池田准教授から経緯をお聞かせください。**池田進** (以下、**池田**) 私はAIMR (東北大学材料科学高等研究所) で、WPIという新しい枠組みの中で若い研究者を支援しています。世界トップレベルの研究拠点を作るために、SEMやX線回折などの基本的な装置を設置した共通機器室を立ち上げ、研究所内の誰もがいつでも装置を使用することができ、海外の研究者が来てもすぐに実験できる施設を目指しました。立ち上げ当初は装置が揃っていませんでした。足りない部分はAIMR内の研究室の装置を使い、それでも足りない時はTSCに相談する仕組みをとっていました。今回の案件は、私自身ではなく、AIMRの海外の研究者が今すぐ圧力計を使いたい、というところから始まりました。私は全体のコーディネートをしていて、当

時AIMRの共通機器室の担当をされていた熊代先生に研究者の相談ごとをお願いし、そこから総合技術部の相談窓口を利用させてもらった、という経緯です。

熊代良太郎 (以下、**熊代**) 実際、AIMRに圧力計はあったのですが、研究者は別の装置に組み込んで使いたいという要望を持っていました。圧力計の接続をするには電源関係さえなんとかすればすぐに使えるという状況です。私はTSCに属しているので、総合技術部は技術的なことならなんでも相談できるというのは知っていました。それで、まずは回路の設計やアドバイスがいただければ、と連絡したんです。**後藤忠彦** (以下、**後藤**) 電気回路測定実験の専門員のメーリングリストに相談内容がきて、代表から指名を受けて一番距離的に近い私が担当することになりました。熊代さんからは回路や手順を教えてほしいというオーダーでしたが、電源接続の簡単な作業でしたし、スイッチなどの材料やパーツをたまたま持っていたので、私がやっていたいですかと言って対応させてもらいました。

熊代 設計指針をもらえれば私たちでできると思っていたのですが、後藤さんに頼んだ方が格段に早かったですね。研究者も作ることは技術的に可能なのですが、安全性は考えていないことが多く、共用装置ということもあり、技術職員のスキルが必要でした。

池田 外部の業者に頼んでいたら数日かかるところを1時間でやってくれました。

熊代 外国人研究者が外注するのはハードルが高いですからね。TSCはそういったところを期待されている部分もありますが、学内の各研究室で設備共用している装置をTSCに登録していただいて、それを部局間、あるいは学外に対して情報公開し、利用者に仲介するのが主な業務なので、装置を動かせる相談窓口があるのは良いと思います。

後藤 1件目の相談依頼だったので、舞上がった気分と不安な気持ちがありましたが、受けて良かったです。私も大学の役に立てればそれが一番なので。

— 今後、TSCと相談窓口の連携についてはどう考えますか？

池田 TSCは全学の共通機器システムということで始まったと思いますが、実際その装置を持っている研究室の技術職員が装置を動かすことを考えると、一体化して動いてくれたらいいと感じます。現場サイドとしては、そこをお願いすれば技術職員がいて機器が使えて測定するところまでやってもらえる、というのが理想的ですから。

熊代 TSCは現在、学外に対しての各種相談窓口というスタンスをとっています。学外からの相談は増加していて様々な内容のものが寄せられているので、そういった時に、我々では対応できない技術的な部分は総合技術部に聞いて回答したいという要望があります。

— 総合技術部の相談窓口は学内を対象にしている、料金

体系の違いなど今の体制ではTSCと統一したサービスの提供が難しいですが、学外のことも大学として考えていかなければならないかもしれませんね。

池田 相談窓口にはどのくらいのことを頼んでいいのかわからない部分が多いので、まずは事例を重ねて、研究者の目に届くようにすれば依頼したい人はいると思いますよ。

— 後藤さんは今回の経験を技術職員としてどのように感じていますか？

後藤 私が所属している多元物質科学研究所は多くの研究室と仕事を広げていて、技術を仕事に発展させやすい環境に身を置いているので、今回の仕事に違和感はありませんでした。これからもできることがあればやっていきたいです。

三浦 今後も、相談窓口の実例等を広報し、たくさんの優れた技術を紹介することで、利用者を増やしていきたいですね。
(2017.11.06)



三浦重幸

みうら・しげゆき | 総合技術部副部長。情報・ネットワーク群。昭和51年筑波の高エネルギー物理学研究所 (当時) に採用。平成4年金属材料研究所に転入。主として放射線管理、ネットワーク管理に従事。趣味はスポーツをする事と観る事。



大友雅彦

おおとも・まさひこ | 情報・ネットワーク群代表、工学研究科。昭和54年工学部情報工学科に採用。系内の教育用計算機システム、情報システムの運用・管理等に従事。休日はテニス、たまにゴルフ。



猪狩佳幸

いがり・よしゆき | 昭和60年科学計測研究所 (当時) 採用。平成29年より分析・評価・観測群代表。固体表面化学反応研究に参画、多元研技術室の運営補佐と職群の運営に従事。趣味はJ-POPライブ、特技はマンガ。



渡部浩司

わたべ・ひろし | 平成25年サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター採用。平成27年より放射線管理研究部教授。放射線を利用した医療機器開発。学内の放射線管理業務に従事。ソフトウェアの開発が仕事であり、趣味。



望月俊介

もちづき・しゅんすけ | 平成21年工学研究科採用。技術部合同計測分析班に配属。分析機器 (質量分析計、クロマトグラフ) の管理・運用、依頼分析等に従事。趣味は音楽鑑賞と演奏。



熊代良太郎

くましろ・りょうたろう | テクニカルサポートセンター特任准教授。理学研究科物理学専攻、原子分子材料科学高等研究機構を経て現職。設備共用に関するコーディネーター業務に従事。



池田進

いけだ・すすむ | 材料科学高等研究所 (AIMR) 准教授、副事務部門長 (研究担当)。平成2年本理学部卒業。平成20年よりAIMRにて勤務。共通機器室のコーディネートを含み研究支援業務全般に従事。趣味は音楽鑑賞など。



後藤忠彦

ごとう・ただひこ | 平成3年科学計測研究所 (現 多元物質科学研究所) に採用。平成27年から電子回路・測定・実験群副代表。超高真空技術、電子回路、電子線リソグラフィ等による研究室支援に従事。趣味は温泉巡り、車いじり、釣り。



FACE TO FACE

vol.04



生物・生命科学群

東北大学病院 技術専門員

大竹誠一さん

おおたけ・せいいち | 平成26年より生物・生命科学群技術専門員。医学系研究科附属動物実験施設中央棟運営に従事。上級バイオ技術者。専門は発生工学技術。趣味はルアーフィッシング、スポーツ観戦など。

生物・生命科学群

農学研究科 技術一般職員

有野祐樹さん

ありの・ゆうき | 平成23年川渡フィールドセンターに採用。平成28年より農学研究科附属動物研究棟に勤務。動物施設の管理・運営、利用者教育、動物を使った教育研究支援に従事。趣味はバドミントンとワイン。



生物・生命科学群は、①植物施設管理 ②動物施設管理 ③遺伝子操作・細胞培養 ④解剖・病理・法医 ⑤歯科衛生・管理 ⑥研究室支援・学生実験の6グループから成り、業務は、実験で使用する動植物の育成管理・微生物や細胞の培養保存・病理解剖など多岐にわたります。日々発展し続ける生物・生命科学の技術。その中で研究者や学生を支えるため、自己研鑽に励む2人に、仕事のこと、今後の展望等についてお聞きしました。

あらゆる視点から培った動物施設運営の基礎を学ぶこと

— 経歴と現在の業務を教えてください。

大竹誠一(以下、大竹) 東北大学病院所属で医学系研究科附属動物実験施設の技術専門員として働いています。公的研究所で研究アシスタント、民間ベンチャー企業で遺伝子組換え技術を用いた研究、ブリーダー会社で遺伝子組換え作出受託業務のリーダーを務め、三重大学で同じシステム構築を任せられ、その後縁があって東北大学に異動しました。公的研究所から民間企業、そして大学の技術職員といういろいろな立場から動物実験を見てきました。その経験を生かして動物実験施設の運営業務に携わっています。

有野祐樹(以下、有野) 私は新卒で農学研究科に入り川渡のフィールドセンターへ配属されました。大学では稲の研究をしていたのですが担当は畜産に。農場では重機や溶接、家畜の人工授精などの業務を行うにあたり資格が必要だったので、資格も取得しました。5年間畜産に関わり続けたので、周囲の人の認識はすっかり「動物の人」。そこから現在の動物研究棟に移り、運営管理をしています。
大竹 2年前、有野さんは実験動物については全く知らない状態だったので、農学部からオファーがあり、研修をしましたよね。研修はいつも実務中心に行うのですが、有野さんは運営を担うとお聞きしたので、基本的な運営の考え方を中心に研修しました。
有野 うちが学生が飼育や掃除などの実務を担当するので、運営の立場からどのように指導すればいいかを学べて良かったです。ルールを厳しめに設定することなどいつも念頭に置いています。
大竹 ルールを厳しくすると最初こそ抵抗があるかもしれませんが、共同利用施設は使用する人が入れ替わるのでいずれそれが当たり前になります。農学部のキャンパスが雨宮から青葉山に移るタイミングで、問題のあったルールを改善できるチャンスでした。
有野 そうですね。しかし1人でルールを考えていると煮詰まってきた何が正解かわからなくなってくるんです。その時に学内外で動物施設に関わっている大竹さんの存在が助けになりました。
大竹 研修の最後に「窓口は開けておくから、いつでも来ていいよ」

と言ったら、本当にアポ無しで来て(笑)。

有野 医学部に用事があったのでついでに相談に乗ってもらおうかと思ったんです(笑)。

これからの実験動物施設と技術職員のあり方を考える

— 施設の設計や管理で大切なことは何ですか？

大竹 実験動物の世界には、言葉は悪いですが流行り廃りがあります。僕が専門にしているマウスでは、トランスジェニックという遺伝子組換えが主流でしたが、ES細胞が出てきたことによってノックアウトマウスの研究が盛んになり、今はゲノム編集の時代です。動物種も犬より豚の実験が増えています。動物実験施設の10年後を予測して建設するのは難しいことです。何に対しても対応できるようにすると中途半端なものになりますし、何かに特化すればそれが廃れた後に使いづらくなります。現状では共同利用施設なので、「研究者が使いやすいように何にでも対応できるものにはしたいよね」という話を教授としてしているところです。
有野 今ある施設は、今いる研究者が要求したものが作られていますよね。研究者が入れ替われば「全く使えません」と言われる可能性があり、使用料金を決める段階で非常に悩みます。医学部だと一定数の使用者が見込めますが、農学部は浮き沈みが激しいの

で、使用量が減った際にも施設を維持できるような料金設定をしなければいけません。ハードだけでなくソフト面でも業界の流れに対応できるようにしていきたいです。

— 現在感じている課題と今後の展望は？

大竹 僕は自分が予想していたより、早く管理者のポジションに就いてしまいました。当初は戸惑いましたね。技術職員は現在の仕事にやりがいを感じています。それがある日突然に人をまとめる力を求められます。僕は有野さんと出会い後進育成にやりがいを感じられたので、今後も人材育成の企画に携わるようにします。技術力は東北大学の財産なので、それを伝えていくシステムを作っていかなければと考えています。
有野 私は現在、自分が技術的な支援を行えない状態でマネジメントをしているので、技術的支援もしっかりと出来るようになってほしいです。支援業務ができる施設の業態は、大学で動物実験を行う上ではプラスになるのではないのでしょうか。技術支援とマネジメントの両方ができる職員になりたいですね。
大竹 今からでも十分やれると思いますよ。有野さんみたいに一生懸命で何事にもチャレンジしようとしている人たちは、失敗する確率も高くなりますが、何もせず無難に過ごしている人より評価が低くなることはないでしょう。前向きなチャレンジを評価することは大切だと思いますし、応援しますよ。

News & Information

総合技術部は事業支援機構総合技術部となりました

総合技術部は平成29年4月1日(土)付で設置された本学事業支援機構の業務組織のひとつとなりました。事業支援機構は、東北大学における適切な職場環境の形成及び教育研究に関する技術的支援を行うことにより、教育研究活動の一層の充実に資することを目的とし、総合技術部と環境・安全推進センターの2つの業務組織をもつ機構として設置されました。

同機構は、その目的を達成するため、環境保全センター、動物実験センター及び遺伝子実験センターと有機的に連携することを基本としています。組織上は事業支援機構の業務組織となり、従来の関連規程及び内規等は廃止及び一部修正されましたが、総合技術部の実質的な運営、体制等は特に従来と変わることはありません。これからも指定国立大学法人となった東北大学の教育研究を技術面から支える技術者集団として一致団結し、熟練者から若手職員への技術継承を行うとともに、最先端技術の習得を進めつつ、事業支援機構総合技術部全体の技術力向上を図っていきましょう。

総合技術部副部長 三浦重幸

平成29年度東北大学総合技術部職員研修について

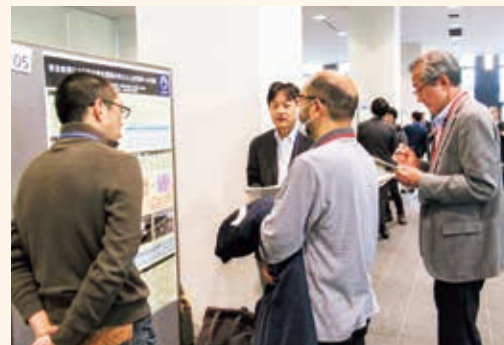
東北大学総合技術部職員研修は、東北地区国立大学法人等技術職員研修と隔年で開催されています。今年度は11月17日(金)に片平さくらホールで開催しました。

準備を早くから行うことの重要性を認識しながら、全てが後手後手に回ってしまい、現場で実務を担当してくださった技術職員の方々にご迷惑をおかけすることになり申し訳ありませんでした。準備の遅れはありましたが、研修146名、ポスター発表22件、情報交換会59名と前回平成27年度を上回る参加をいただきました。

ポスター発表の部では「電子光物理学研究センターにおけ

る加速器運転経費削減の取り組み」(南部ら、電子光物理学研究センター)と「ICP-OESにおける有機溶媒試料の直接測定と高感度化の実現」(古内ら、工学研究科・工学部)の2件が優秀発表賞に選出されました。

総合技術部研修部会 ポスター発表担当班 伊東久美子
(分析・評価・観測群、農学研究科・農学部)



2020年度東北大学総合技術研究会の 実行委員会準備委員会の報告

総合技術部では、2020年度に総合技術研究会を開催します。2018年4月から実行委員会がスタートできるよう、11月1日(水)に第一回準備委員会を開催しました。総合技術研究会は、全国の大学、高専、共同利用研究所などの教育・研究機関から500~1,000名の技術職員が集まり、技術を中心に、広く(特別講演会、情報交換会など)、深く(分科会、ポスター発表など)、地域を超えて情報や意見を交換し交流する場です。また、目的や内容を開催校が自由に決められることが特徴で、期間や場所、企画についても工夫できるという柔軟性・発展性を持っています。

総合技術部として総合技術研究会を開催するにあたり、本学独自の目的と目標を設定できればと考えています。技術を中心に地域の枠を超えて情報や意見を交換し、交

流するというだけでなく、より多くの技術職員に参加してもらうための職場環境の整備や参加した技術職員の中から、次世代リーダーを発掘し、育成を図ることができればと考えています。総合技術研究会を開催することが目的ではなく、開催することで総合技術部の将来を明るく照らすことができるようにする、そこに焦点を当てて取り組んでいければ良いと思っています。

より多くの技術職員から、ご支援とご協力をいただけるものと期待しております。

2020年度東北大学総合技術研究会実行委員会準備委員会
猪狩佳幸

平成29年度みやぎ県民大学で講演



みやぎ県民大学は、県立学校や大学等の専門的な知識や技術を県民の方々に学んでいただく講座です。多元物質科学研究所では「ミクロの世界を測る、見る、操る」という講座を開催し、7月28日(金)にその第4回講座を「ミクロの世界を調べる加工技術」と題して講演を行いました。講演では、多元研の機械工場・ガラス工場・光器械工場職員が、様々な工作機械や継承された技術を用いて研究者から依頼された製品を製作していることを説明しました。その後、各工場の見学を行い、受講生は作業中の職員の手元を興味深そうに覗き込んだり、製品を手に取りながら、担当職員に質問をしていました。

この講座は全4回の構成で、第3回まではテーマに沿った研究をしている教員が講師を担当しました。そのため、技術職員の私に講師を務まるかと講演では緊張しましたが、工場見学では気軽に受講生と会話することができました。研究を支えるために、技術職員が様々な仕事を行っていることを県民の方々に知っていただけたら幸いです。

三浦和浩(加工・開発群、多元物質科学研究所)

片平まつりが開催されました



片平まつりは、隔年で研究所(金研、加齢研、流体研、通研、多元研、災害研、東北アジア研究センター、学際研、AIMR)や史料館を一般の方々に公開するイベントです。子供連れの家族での来場者が多いため、子供にも分かりやすく研究内容を説明した展示や遊びをまじえた実験教室が行われています。

今年度は10月7日(土)・8日(日)に開催されました。雨が降ったり、晴れたりと落ち着かない天気でしたが、9,272名の来場者数となりました。今年はモンゴルのゲル(家屋)の展示(東北アジア)、ペットボトルロケットの実演(流体研)、立体映像での宇宙旅行体験(学際研)が人気となりました。各研究所所属の技術職員は、技術室の業務紹介の展示や実験教室に参加し、来場者に楽しんでいただけるよう努めていました。

今後の技術職員が進む道

総合技術部の職群制度が職員の資質向上と部局を超えたキャリアパス構築を目的に立ち上がり、数年が経過しました。ある程度の職員には、この職群制度が浸透してきています。今回は、職群運営側としての視点で、今後の技術職員が進む道というものを考えてみました。

技術職員は、専門性の高い知識と技術を持って部局の「研究・教育」に貢献する事が主業務であるという観点から、未だに職群制度を理解していない教員が多く存在するようです。同時に技術職員の中にも部局への所属意識を強く持ち、自身で技術を確立し、高めようとして職群制度に違和感を持っている方も少なくないと感じています。

その中で我々は、職群制度の部局を超えた研修や交流会を地道に行うことで、人材育成や技術の向上を促進しようと努力してきました。その結果、職群制度が重要な制度と評価され、積極的に参加しようとする技術職員も着実に増加しています。

一方で、この制度を継続するために解決しなければならない問題点があります。先に述べた通り、職群制度が部局

総合技術部の組織体系についての要望

私は、総合技術部には賛成いたします。部局にとらわれないこと、他部局の教員や学生の技術支援をすることは、私たち技術職員の存在価値を高めることにつながります。また、同じ職種で技術職員と研修などを通じて情報を交換し、互いに技術の向上を目指して切磋琢磨することは技術職員にとって必要不可欠なことです。しかし、現状の職群を中心とした組織体系には実際の職務との間に違和感を感じます。それぞれの技術職員は部局あるいは職場に所属しています。これを考慮せずに組織をつくっても、総合技術部の運営には弊害になると思います。現に総合技術部が組織された現在でも、技術職員の採用、昇給・人事評価などの人事は部局が主導で執り行い、総合技術部は最後の決済を行っているに過ぎません。現在、技術職員の昇格は総合技術部で決定していますが、部局が推薦しています。このような状況では、実質な権限をもつ各部局と承認決定をおこなっている総合技術部はばらばらに動いていると感じられます。実際、技術職員にとって各部局と職場は切り離せない関係にあり、各部局とのつながりをなくして、総合技術部〇〇職群だけで、私たちの職分を語ることはできません。このような状況中、総合技術部は研修だけを行う組織になってないでしょうか。

総合技術部に関するご意見、主張、体験記などを随時募集しています。匿名での掲載も可能です。
○送り先・お問い合わせ E-mail : integ-pub@grp.tohoku.ac.jp

や教員を中心に理解されていないため、職群研修や交流会の企画・開催が、部局と板挟みの二重管理下で行われている現状です。そのため活動に参加したくてもできない技術職員もいることでしょう。

さらに、我々は専門性の高い知識と技術は持っていますが、制度を運営していく上で組織を管理・運営する経験や能力が足りない事もあげられます。現在は統括技術専門員や技術専門員が中心となり、部局の業務と調整しながら、手探り状態ながらも後進のために轍を作っていますが、「名選手名監督にあらず」という言葉にもあるように、技術職員として専門技術を極めた人が組織の管理・運営に適任かと言われると疑問も残ります。

これらの問題点を解決するため、技術職員が専門技術を継承するのと同じように、組織を管理・運営できる人材を育成する事が必須になると考えます。ある程度、経験を積んだ後で、部局でさらなる技術の確立を目指す職員と職群や組織の管理・運営をしながら人材育成を行う職員という2つの道があっても良いのではないのでしょうか。(匿名)

いま総合技術部では組織の見直しをおこなっていると伺っております。組織見直しの際には、現存する各部局の技術組織を活用した総合技術部の運営をご考慮いただくよう強く要望いたします。私から、次の3点を提案申し上げます。

- (1) 総合技術部の職群名と同じ班あるいは部門を各部局の技術部に置き、各技術部には、技術部を統括する責任者と各班あるいは部門に代表者を置く。
- (2) 統括技術専門員会議を各技術部代表者会議に変更して総合技術部の運営あるいは方針を決定する。また、各班あるいは部門の代表者で職群会議を行い、業務内容ならびに研修等の開催を議論する。
- (3) 技術部をもたない部局には、技術部を設置するか、あるいは、各々の自持は守りつつ協力関係としての技術部の合併を模索する。

以上3項目を考慮した組織づくりを行うことにより、現状より運営しやすくなると考えられます。本提案をご考慮いただき、このような要望に対してご回答頂けましたら幸いです。一部の限られた人たちのみで組織を作りあげるのではなく、色々な世代の技術職員の意見を取り入れ、議論して決められることを切に願います。(匿名)

WAZA-ALIの職群トークとMy Home Ground、
そして表紙・裏表紙の写真は、
6つの職群ネタを順番にまわしています。
4号まで来ましたから、あと2つで一巡します。
6号まではなんとかがんばって刊行したい所以です。

(ところで、6号のあとはどうなるの?)

WAZA-ALI

東北大学 事業支援機構 総合技術部 部内報 | 技あり

vol. 4

表紙：1970年代に使われていたブラウン管オシロスコープ(電子光物理学研究センター提供)

編集：東北大学事業支援機構総合技術部

取材・文：上林晃子

デザイン・撮影：株式会社フロッツ

印刷：田宮印刷株式会社

発行日：2018年3月31日

発行：東北大学事業支援機構総合技術部
〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2丁目1-1
<http://web.tohoku.ac.jp/tech/>

© 東北大学事業支援機構総合技術部
2018 printed in Japan